**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６６回　（２０２０年８月９日）**

**・第６６回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３８頁**

**（前回の補足）**

「バクティ・ヨーガの実践が（他のヨーガと比べて）らく」な理由は、それが自然的だから、という理由も付け加えておいてください。愛という感情は私たちが元来持つナチュラルなものですから、バクティ・ヨーガの実践も私たちにとってナチュラルな実践なのです。

**（今回の勉強）**

**バクティ、バーヴァ、マハー・バーヴァ**

最初がバクティ、そのあとがバーヴァ。シュリー・ラーマクリシュナは、「熟していない果物がバクティ、熟すとバーヴァ、完全に熟すとマハー・バーヴァ」とおっしゃいました（＊マハーは「偉大な」という意味）。

普通の信者（ジーヴァートマン）はバクティを持っていて、それが進むとバーヴァになります。しかしマハー・バーヴァまで行く人は神の化身だけ、たとえばチャイタンニャ・デーヴァやシュリー・ラーマクリシュナです。普通の信者にはマハー・バーヴァはあまりにも高い目的です。まずはそこまで考えず、「どのようにバクティからバーヴァに進むか」を考えて実践したほうがよいでしょう。

ところで、サマーディには種類があります。バーヴァ・サマーディは特別な神を思ってサマーディに入ること、それとは異なり、ニルヴィカルパ・サマーディは特別な神に集中してサマーディに入るのではありません。神と関連したサマーディとしては、バーヴァ・サマーディ、マハー・バーヴァがあります。

**Ecstatic loveの状態の写真**

今回も、前回に引き続き、愛の法悦（英語本ではecstasy of love）について説明していきます。Ecstatic loveは、『福音』では「愛の法悦」と訳されていますが、皆さんはそれを聞いてどんなイメージを持ちますか？

参加者：（法悦は）普段使わない。

使わない言葉だからイメージできませんか？　何の言葉を使えばecstatic loveをイメージできるのでしょうか？　私はecstatic loveのイメージがわく日本語を知りたいです。

参加者：「恍惚的な愛」。

参加者：キリスト教の讃美歌だと「歓喜」という言葉があると思う。

讃美歌では特別な意味で「歓喜」と使っていますね。たとえば「イエスのecstatic love」や、シュリー・チャイタンニャにもそのイメージがあります。私は言葉よりも、その状態の様子を見たほうがイメージしやすいと思います。ここでシュリー・ラーマクリシュナの写真をお見せします。

シュリー・ラーマクリシュナには3枚の写真があります。また、『福音』の表紙になっている絵（＊これはアメリカ人のお坊さん、タダートマーナンダジーが自分の楽しみのために描いたものですが、とても素晴らしい絵です）もあります。それらのシュリー・ラーマクリシュナの顔を見てください。それを見るとecstatic loveがわかります。

言葉には限度があります。しかし写真の顔を見て、「おお！　普通の人に、これほどの喜びの表情はあらわれない！」とすぐにわかります。もちろんみな喜びの時には笑います。しかしその笑顔とecstatic loveの喜びの表情とはまったく違います。これは本当に喜びの顔です──シュリー・ラーマクリシュナの写真は歴史上、初めて撮られたecstatic loveの写真です、これがrealです。シュリー・チャイタンニャは絵で描かれたものでした。写真ではありませんでした。そして、言葉を使ってよりも、写真を見てecstatic loveのイメージがよくわかります。

**Ecstatic loveは魂の喜び**

ecstatic loveについて、バガヴァッド・ギーターではこのように言っています。とても大事な節です。

*バーッヒャ・スパルシェーシュ　アサクタートマー　ヴィンダティアートマニ　ヤット　スカム　/　サ　ブラフマ・ヨーガ・ユクタートマー　スカン　アクシャヤン　アシュヌテー***（5-21）**

食事を食べて、景色を見て、音楽を聴いて、などの感覚を通じた喜びが、普通の喜び（世俗的な喜び）ですが、それは、感覚が（外界の）感覚の対象とコンタクトすることで得られる喜びです。つまり、喜びの源は外です。

ですがこの節ではそれとは別の喜びがあると言っています。それが「*ヴィンダティアートマニ　ヤット　スカム*」、つまり自分の中、すなわち魂から出るスカム（喜び・楽しみ）があると言っています（＊出る＝ヴィンダティ）。普通の喜びとは全く違う喜びです。

「スカム」と「アーナンダ」（至福）は同じです。アーナンダは中から出ています。どのように？　「*サ　ブラフマ・ヨーガ・ユクタートマー*」、アートマンがブラフマンとコンタクトして１つになると、至福があらわれます。

そしてそのスカムは「*アクシャヤン*」、衰えることはありません（＊アは否定を表す接頭辞。クシャヤ（衰える）を否定している）。しかし普通のスカム、たとえば人間関係の愛などによる喜びには、始まりがあり、徐々に増えて、徐々に減ります。あるいは全く無くなるかもしれません。しかし、衰えない、なくならない喜びがあります。それがecstatic loveです。

しかし私たちにはその経験がありませんから、「中から楽しむとはどういうことか？」と思います。私たちの経験の100パーセントは感覚と感覚の対象によるものですから。では、たとえば記憶の上で喜ぶのは、中の喜びと言えるのではないでしょうか──子供と離れて住んでいても、母親は記憶の中の子供を思い出して、愛情を感じ、記憶の中で喜び楽しみます。それは中の喜びではありませんか？──いいえ違います。それは中の喜びではありません。それは外の喜びです。なぜなら最初のコンタクトが外だからです。源は外です。その後、記憶に入れたのです。ですから中の喜び、魂の喜びではありません。

では、魂の喜びは可能だという証明は何ですか？──証明は聖者たちです。ブッダもイエスも外からのものではない、中から喜びが出ています。それはecstatic loveです。

**Ecstatic loveとは、すべての中心は神**

（前回話しましたが）「神がもっとも大事」「神をもっとも愛している」「神が一番の楽しみ・喜び」の３つが揃わない限り、ecstatic loveの状態に至ることはありません。それは「自分のすべてのやり方・考え方の中心が神」ということです。すなわち「他の人を愛しますが、神とその人がつながっている状態で愛します」ということです。もしそうでなく愛すと、それは世俗的な愛です。

ときどき家住者には混乱があります、もし神を愛すと家族や親戚への愛が減ってしまうのではないかと。しかしそんなことはないです、心配しないでください。重要なことは、態度を変化すること、それだけです。もちろん簡単なことではありませんが、ecstatic loveへと至るための一番大事なポイントは、「まず神を愛す」ということです。自分の中の神を愛します。すると家族にも神を見て、家族の中の神を愛すことができます。

もちろんそのことを聞いて、「すべての人の中に神がいる」という実践をしていますし、瞑想のときに何回もそう考えています。しかし買い物に行って、店員さんの中にシュリー・ラーマクリシュナがいるというイメージを持てているでしょうか？　電車に乗って、この人は女性、あの人は男性、あの人は若いと考えるのではなく、シュリー・ラーマクリシュナだと考えているでしょうか？　どうして常にそのように考えられないのかというと、シュリー・ラーマクリシュナへの愛が安定していないからです。

シュリー・ラーマクリシュナへの愛、それが基礎です。すべての愛の中心は神、すべての楽しみの中心も神です。自分の人生の最重要なものが神となると、ecstatic loveはできます。それがベースとなって、人に神を見ることができるようになります。それ以前は、心の中に像（イメージ）があっても、それは想像に過ぎず、自分にも人にも神を本当に見ることはできません。

**Ecstatic loveに必要な２つのもの──熱望と忍耐**

ではecstatic loveには何が必要でしょうか？　yearning（熱望）とpatience（忍耐）の２つです。それも、どちらか１つではなく、２つ合わせて必要です。しかし普通に考えると、熱望があると、“すぐ”愛したい、“すぐ”悟りたいというイメージがあり、忍耐というと、“ずっと”忍耐というイメージで、二者は相反するように思いませんか？　ずっと忍耐すると熱望は減ってしまうようだし、すぐ欲しいということは、忍耐は必要ないように思えます。

人生の目的について、絶対に今生で成し遂げるという考えと、今生から始めてもまた再生して成し遂げればよいという考えがあります。シュリー・ラーマクリシュナは、後者の考えに対しては「なぜそのようなことを考えるのだ？」とおっしゃり、全く好みませんでした。熱望を持つということは、今生で目的を成し遂げるという信仰を持つということ、今生で神を愛し今生で悟るのだという信仰は、熱望によって可能となるのです。

ですが今日欲しい、明日欲しい、今週欲しい、とは考えないでください。それは熱望ではなく、無理なものを欲しがっている心の１つの状態です。純粋ではない心で悟ることはできません。それは非論理的なのですから、非論理的なことは考えないでください。考えることは、①目的、②目的成就のための時間（スパン）です。それを考えて決めてください──①は悟り、②は今生です。すると、忍耐とは（①と②のために）毎日実践する、ということになります。

このように、熱望と忍耐を合わせて実践を続けると、神への愛が増えます。それについての歌を、シュリー・ラーマクリシュナは歌っています。

**📖読み**

**『福音』３８頁下段　最後の行**

*こういって師はふたたびおうたいになった。*

*おおわが心よ、お前はどのようにして、神の性質を知ろうと努めているのか。*

*お前は、暗い部屋に閉じ込められた狂人のように手さぐりをしている。*

*は愛の法悦によって悟られるのだ。それなしにどうしての深さをはかることなどができるだろう。*

*否定ではなく、肯定によってのみ、を知ることができる。*

*ヴェーダによってでもタントラによってでも、六派の哲学によってでもない。*

*がお喜びになるのは、愛の万能薬の中においてだけだ、おお心よ。*

*は肉体の奥の奥底、永遠の歓喜の中に宿っておいでになる。*

*そしてその愛のために、偉大なヨーギーたちは時代を超えて、ヨーガを行っている。*

*愛が目覚めると主は磁石のように、その魂を彼のそばにお引き寄せになる。*

*私が母と呼んで近づくのは彼である、とラーム・プラサードは言う。*

*だが私はここ市場の中で、この秘密をぶちまけなければならないか。*

*私が与えたヒントによって、おお心よ、その存在がなんであるか、察するがよい！*

**歌詞の解説（１）**

神を悟りたいならどうしたらよいか、と心に問うところから、歌詞は始まります。Mad man（狂人）は、たとえば東に行きたいのに西に向かって歩くというような、考えと正反対な行動をとります。また、暗い中で何がどこにあるかもわからず探し物をしたり、本当に探し物がそこにあるかわからないのに探していたりします。しかし、その状態で探しても、探し物は見つかりません。それは無駄です。

では探し物（神）を見つけたいならどうしたらよいか──神へのecstatic loveを育むことです。ecstatic loveがなければバーヴァには至れない、神を悟れないからです（＊サンスクリット語の歌詞にはアバーヴァとあります；アは否定を表す接頭辞）。

**歌詞の解説（２）**

ベンガル語のオリジナルの歌詞では、次に「月」が出てきます──月は比ゆの表現で、詳しい説明が必要です。そこで英語の翻訳では（それを訳した日本語版も）この部分は割愛しています。今日はオリジナルのベンガル語の歌詞を説明します。

たとえば手の神はインドラ、というように、感覚にはそれぞれ司る神々がいます。心の神は月です。月は、皆さん知っているかもしれませんが、満月のときには月の力に水が引きつけられて海水が上昇したり、体の中の水分にも影響が出ます。mad manは満月の日に状態がひどくなる、ということをインドの人たちは観察によって知り、そのことから月が心を司る神となりました。頭がおかしくなるのは心の問題だからです。

ベンガル語の歌詞には、「月をコントロールしてください、力をいっぱい使って」とあります。意味は「心をコントロールしてください、一生懸命実践をして」ということです。「ecstatic loveを得るには、心をコントロールする実践を一生懸命してください」ということです。

**歌詞の解説（３）**

ベンガル語のオリジナルの歌詞と英語・日本語の歌詞では、順番が違っています──ベンガル語の歌詞で次に出てくるのは神はどこにおられるか、「*は肉体の奥の奥底、永遠の歓喜の中に宿っておいでになる*」というところです。

大きな建物の中に、小さな隠し部屋があり、そこにお金の入った鉄製の金庫があるとイメージしてください。金庫は泥棒さえ見つけることのできない、隠れた場所にあるのです。建物は肉体、隠れた場所は「*肉体の奥の奥底*」、つまりフリダヤ・アーカーシャや、心の空（と言うイメージ）の場所です。その特別な秘密の場所に、神は隠れておられます。

暗い夜には見えませんが、月が消えると（＝夜から朝になると）見ることができます。つまり、心のコントロールができたら、隠れているものがあらわれるのです。「生きているあいだ、力があるあいだ、霊的な実践を十分におこなって、神を探してください。探さないと見つかりません。なぜならいつも心の奥底に隠れているからです」ということです。

**歌詞の解説（４）**

（翻訳の歌詞）「*ヴェーダによってでもタントラによってでも、六派の哲学によってでもない*」というのと同じ内容が、前のページ（p37下段 ＆ p38上段）にも出てきましたが、ではどのようにしたら可能になるのでしょう？──神に対する愛を増やすことです。これがとても大事です。

神はバクティ・ラサがお好きです。［ベンガル語の詩の］「バクティ・ラサ」とは、バクティのシロップ、愛のシロップという意味です。また「ラシーカ」とは、ラサが好きな人という意味です。神は「バクティ・ラサのラシーカ」です。しかし哲学は、甘くなくてドライです。

神の本性は（英語の歌詞を読んで）「Everlasting Joy」、衰えることのない喜び、永遠の喜びです。アーナンダは楽しみ・喜びで、［ベンガル語の詩の］サダーナンダはfull of ananda、永遠・無限の楽しみ喜びです（＊［ベンガル語の詩の説明？］それを持っている人をサダーナンダマイ（男性神）、サダーナンダマイイ（恵み、女性神）と言います。カーリー女神は恵みですからサダーナンダマイイです）。それは先ほど紹介したギーターの「*スカン　アクシャヤン*」、衰えない喜びと同じです。

大事なポイントは、それを外に探す必要はない、ということです。私たちは巡礼にでかけたり、寺院に参拝に行ったりしますが、それは心の奥底、中にあります。強調は、「外に探さないで、中に探してください」ということです。神はすでに中に自分の中におられます。これもギーターの言う、「楽しみ喜びの源は中」と同じです。

**歌詞の解説（５）**

そのために、ヨーギーたちは一生懸命に実践をして、悟りへ向かいます。そのイメージで

私たちも実践をします。すると悟ることができ、神への衰えない楽しみ喜びを得られます。そこまでいけば、神は磁石となって、鉄という信者の心を常にひきつけるのです。

シュリー・ラーマクリシュナも磁石と鉄の引用をしています。砂鉄と土が混じっていたら、土を取り除いてください、砂鉄だけになると（＝きれいになると、という意味）、磁石（神）は砂鉄（信者の心）を引きつけます、と。その状態になるために、一生懸命霊的実践をします。また、それ以外の方法はありません。

**歌詞の解説（６）**

「*私が母と呼んで近づくのは彼である、とラーム・プラサードは言う。だが私はここ市場の中で、この秘密をぶちまけなければならないか。私が与えたヒントによって、おお心よ、その存在がなんであるか、察するがよい！*」ではヒントが大事なポイントです。

まずベンガル語の「チャトレ」は前庭、「ハリ」は土で作ったポットです。主婦は土製のポットの中に、料理で使うスパイスや調味料をストックしていますが、それは、主婦が腕をふるうための秘密の調味料ですから、わざわざ他人に知らせたくはないものです。だからポットの中身は見せたくないけれども、何が入っているかのヒントを少しだけ知らせることはできます。

それと同じように、前庭に出て行って、大声で他人に知らせたくはないが、私（歌の作者ラーム・プラサード）はヒントを与えることができます。それが、「*私が母と呼んで近づくのは彼である*」という部分です。

ラーム・プラサードの決めた神（彼の理想神）はカーリー女神です。「*母*」という言葉を聴けば普通はカーリー女神をイメージしますが、しかしその母は、ギャーナ・ヨーギーがブラフマンと言うものと同じだ、とラーム・プラサードは心に言っているのです。「*彼*」が誰かとははっきり言っていませんが、「心よ、ヒントでそれを理解してください」と言っています。

**まとめると**

①Ecstatic loveが目的なら、一番最初の段階は、霊的な実践をする。ポイントは心のコントロール。それを一生懸命に実践する。

②Ecstatic loveがなければ神を悟ることはできない。

③また、神は心の奥底に隠れておられるので、すぐに見つけることもできない。たくさんの実践をしないと目的を成就することはできない。

④神の本性はサダーナンダ（＝full of ananda）、絶対の至福。

⑤Ecstatic loveが目的なら、（ヨーギーたちのように）一生懸命実践をする以外に方法はない。すると、神はまるで磁石が鉄を引きつけるように、信者の心を常にひきつける。

⑥そのためには「今生にそれを悟りたい」という熱望が必要。

⑦ラーム・プラサードは言う、「私が礼拝しているマザー・カーリーとブラフマンは一緒です」。

バクティ・ヨーガの目的とギャーナ・ヨーガの目的は異なります。バクティ・ヨーガの目的はカーリー女神、シュリー・クリシュナ、シュリー・ラーマクリシュナなどの個人的な理想神を悟ること。ギャーナ・ヨーガはブラフマンを悟ることです。ですけれども、理想神もブラフマンも本当は一緒です。そのことも忘れてはならないと、ラーム・プラサードは言っています。さまざまなアイディアがこの歌には入っています。

**📖読み**

**『福音』３９頁下段　２行目**

*うたいながら、師はサマーディにお入りになった。彼は西を向き、手を合わせ、上体をまっすぐに、不動の姿で長椅子にすわっておられた。一同は期待をこめて彼を見まもった。ヴィディヤー・シャーゴルも言葉を忘れ、師から目を離すことができなかった。*

**（解説）**

歌いながら、シュリー・ラーマクリシュナはサマーディに入りました。サマーディを見たことはありますか？　これはとても特別な状況ではありませんか？　ヴィディヤー・シャーゴルはヒンドゥ教の信者として生活していましたが、しかし常に神のことを考え、礼拝し、祈るという意味の信者ではありませんでした。彼は有名な学者で、慈悲深く、聖典も勉強しましたが、結論は「神はいるが、神を悟ることは不可能だ」ということでした。

ですが、今、聖典に書いてあることが、目の前で起きています。ヴィディヤー・シャーゴルは生まれて初めてサマーディの状態を見ました。

ヴィディヤー・シャーゴルはとてもラッキーでした。サマーディを見るために、わざわざドッキネッショル寺院に行かなくても、シュリー・ラーマクリシュナみずからが家にやってきて、ご自分でサマーディに入られ、ご自分でデモンストレーションのようにお見せになったのですから。なぜなら神への信仰がないとしても、ヴィディヤー・シャーゴルは、とても特別な方だったからです。シュリー・ラーマクリシュナが彼の家でサマーディに入ったのは、シュリー・ラーマクリシュナの恩寵でした。

この日、ヴィディヤー・シャーゴルの友人や親せきたちも来ていました。シュリー・ラーマクリシュナがサマーディに入ったことで、聖典の言うことは想像上のことではない、正しいことだという証明になりました。神への恍惚の愛とはどういうものかを見せたのでした。彼らはそれをじっと集中して見ていました。

サマーディとは周囲の環境、外界に対する意識、時間の感覚を100パーセント忘れることです。またそうでなければサマーディには入れません。このことについて、シュリー・ラーマクリシュナはこう説明しました──自分の部屋に入って、ドアをすべてロックします。すると外との関係はなくなります。サマーディとはそのような状態です。

自分の中に入って、外の意識の道路を閉め、中の意識の道路だけにする。すると外に何があるか、誰が歩いているか、何をしているか、何を話しているかの意識はなくなります。「ドアをロックする」とか「意識の道路」という例えはとても興味深いです。シュリー・ラーマクリシュナは、周りに誰がいても（ロックできるから）、関係なくサマーディに入るのです。

この日、シュリー・ラーマクリシュナは身体をまっすぐにして長椅子に座り、手は合掌し、脚は床に降ろしていました。ですが普通サマーディというと、（蓮華座などの）アーサナで座った姿勢で、心を集中し、コントロールしてサマーディに入る、という印象があります。それがヨーギーのサマーディではありませんか？　しかし、シュリー・ラーマクリシュナのサマーディはそうではありませんでした。

あるときドッキネッショルにサードゥ（僧）がやってきて、ベッドに座ったままサマーディに入るシュリー・ラーマクリシュナを見て言いました、「あれ？　最初はよく座ってください。うまく座ることができたら、次はサマーディの実践をしてください」と。シュリー・ラーマクリシュナは、いつでもどこでもどのような身体状態でもサマーディに入りました。その僧にとっては、いえ他の人にとっても、シュリー・ラーマクリシュナのサマーディの入り方は信じられないことなのです。

それは、ヴィディヤー・シャーゴルにとっては普通の状態ではない、特別な状態です。だから集中してじっと見つめていたのでした。

**📖読み**

**『福音』３９頁下段　６行目**

*しばらくして、シュリー・ラーマクリシュナは普通の状態に戻る兆候（きざし）を見せられた。*

**（解説）**

「*普通の状態*」について、説明します。

私たちの場合、「普通の状態に戻る」というと、喜びや怒りに圧倒された状態から普通の状態へと戻る、というイメージです。つまり私たちの普通の状態とは「身体と心が普通の状態」だということです。しかし、シュリー・ラーマクリシュナの普通の状態はそれと全く違います。シュリー・ラーマクリシュナの普通の状態はサマーディの状態です。シュリー・ラーマクリシュナはいつもアッギャー・チャクラとサハスラーラチャクラの中にいます。シュリー・ラーマクリシュナの場合はそこにいるのが普通の状態で、人と話をするにはそこから降りてきて（シュリー・ラーマクリシュナにとっての）特別な状態に入らないと、コミュニケーションはできません。その特別な状態は、私たちの普通の状態なのです。

分かりましたか？　ここでは、私たちがイメージしやすいように、私たちを基準にして「普通の状態」と書いていますが、シュリー・ラーマクリシュナは話をするために、普通の状態であるサマーディから特別な状態になったのです。このことは重要な理解です。

**『福音』３９頁下段　７行目**

*彼は深く息を吸い、微笑しておっしゃった、「神を悟る方法は、愛と帰依の法悦です──つまり人は神を、愛さなければならないのです。ブラフマンであるが、と呼ばれているのです。*

**（解説）**

バクティ、バーヴァ（*愛と帰依の法悦*）、ブラフマンと母なる神は一緒です、という歌の大事なポイントを、シュリー・ラーマクリシュナみずからおっしゃいました。

**『福音』３９頁下段　１１行目**

*私が母と呼んで近づくのは彼である、とラーム・プラサードは言う。*

*だが私はここ市場の中で、この秘密をぶちまけなければならないか。*

*私が与えたヒントによって、おお心よ、その存在がなんであるか、察するがよい！*

*ラーム・プラサードは心に向かって、神の性質を推察することだけを求めています。彼は心に、ヴェーダの中でブラフマンと呼ばれているものを自分は母と呼びかけているのだ。そのことを理解せよ、と求めています。属性を持たない彼が、同時に属性を持っているのです。ブラフマンである彼が、同時にシャクティなのです。無活動なものとして考えられたとき、彼はブラフマンと呼ばれ、創造者、維持者、および破壊者として考えられたとき、彼は本源エネルギー、つまりカーリーと呼ばれるのです。*

**（解説）**

シュリー・ラーマクリシュナの大きな教えが宗教の調和です。シュリー・ラーマクリシュナ以前は、ブラフマンが唯一悟るべきものだと主張するギャーナ・ヨーギーと、カーリー女神が唯一悟るべきものだと主張するバクティやタントラ派の求道者のあいだで論争がありました。自分たちの主張だけが正しいと論争していたのです。

シュリー・ラーマクリシュナの教え、『福音』の大きなメッセージは、それらは同じ存在だということです。同じ存在が、あるときには「性質もなし形もなし」、あるときには「性質があるが形がなし」、あるときには「性質もあり形もある」と異なる姿を見せているだけなのです。ブラフマンとシャクティは一緒です。性質がないときにはブラフマンと呼ばれ、創造、維持、破壊をするときにシャクティと言われるのです。このことは例を使って何回も説かれています。

1人のひとが、ある時間帯は寝て、別の時には起きて仕事をします。寝ている人も仕事をする人も、同じ1人の人でしょう？　また、ヘビはにょろにょろ動くときも、じっとしているときもありますが。そのヘビは同じ1匹のヘビです。そのように、何もせず（無活動で）、性質も形も無いときにはブラフマンであり、そのブラフマンが、宇宙を創造し、維持し、破壊するという活動をするとき、カーリー、シャクティと呼ばれるのです。

以上

**＜Q＆A＞**

**Q）**マハー・バーヴァとプレーマ・バクティは同じですか？

**A）**同じではないです。プレーマもバクティも愛という意味です（前後関係で異なる場合もある）。またプレーマは深い愛と強調する場合もあります。

プレーマ・バクティは、神と信者の関係についての表現です。プレーマ・バクティの信者は、神にいつも会いたい、話したいと、神とのコミュニケーションを望んでいます。彼は神とのコミュニケーションは内で楽しみ、外でも楽しみます。

しかしマハー・バーヴァは、神との相互のコミュニケーションは、中だけであり、外に表れることはありません。

バクティ、バーヴァ、マハー・バーヴァというと、プレーマ・バクティよりはっきりしたイメージが出ます。

・賛歌奉献「ハーローハロマノモヒニ　ケーヴァーレ」

（20200809『福音』勉強会　以上）